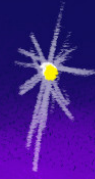


# 四羅維 修羅 と僧



著: 不動カズリンゴ  
絵: みやみやみや鋼



# 目次

|     |    |
|-----|----|
| 一   | 1  |
| 二   | 2  |
| 三   | 3  |
| 四   | 4  |
| 五   | 5  |
| 六   | 6  |
| 七   | 7  |
| 八   | 8  |
| 九   | 9  |
| 十   | 10 |
| 十一  | 11 |
| 十二  | 12 |
| 十三  | 13 |
| 十四  | 14 |
| 十五  | 15 |
| 十六  | 16 |
| 十七  | 17 |
| 十八  | 18 |
| 十九  | 19 |
| 二十  | 20 |
| 二十一 | 21 |
| 二十二 | 22 |
| 二十三 | 23 |
| 二十四 | 24 |
| 二十五 | 25 |
| 二十六 | 26 |
| 二十七 | 27 |
| 二十八 | 28 |
| 二十九 | 29 |
| 三十  | 30 |
| 三十一 | 31 |
| 三十二 | 32 |

|     |    |
|-----|----|
| 三十三 | 33 |
| 三十四 | 34 |
| 三十五 | 35 |
| 三十六 | 36 |
| 三十七 | 37 |
| 三十八 | 38 |
| 三十九 | 39 |
| 四十  | 40 |
| 四十一 | 41 |
| 四十二 | 42 |
| 四十三 | 43 |
| 四十四 | 44 |
| 四十五 | 45 |
| 四十六 | 46 |
| 四十七 | 47 |
| 四十八 | 48 |
| 四十九 | 49 |
| 五十  | 50 |
| 終わり | 51 |

→

修羅の吼える姿を見守る 名も無い僧がいた  
僧は若かりし頃の己の姿を思い出し  
かの修羅を 胸の内にて重ねていた

二

一人の僧と一人の修羅が秋の風に吹かれ  
ただ静かに梨を分け合って食べていた  
修羅が喉を痛めていたので僧が買ったのだ  
僧は毛皮でできた防寒具を着込んでいた  
年を重ねている僧を気づかい修羅が作ったのだ

三

巨岩を睨んでいる修羅を 名も無い僧が見守っている  
その訳を問わずとも 僧は修羅の胸の内を理解してあげていた  
彼は己の業を見つめ直したいと思い あの大きな岩を選んだのだ

## 四

早朝に目を覚ました修羅は 胸の内で燃え滾る炎に苦しめられていた  
他者から受けたかつての傷跡 苦痛の痕跡が呻きだす  
燃え上がる鬼が首をもたげる  
「さあ 黙っているつもりか 報復しろ」  
修羅は両の手で拳を作り わなわなと震わせていた  
いや 駄目だ 業の声を鵜呑みにしてはいけない  
良心の呼びかけが食い止めてくれる



## 五

昼を過ぎた頃 わあわあと大声で泣いている修羅を 皆が遠めに眺めていた  
名も無い僧がそっと歩み寄り 穏やかな声で問いかけた  
「どうしたのだ 悲しいことがあったのか」  
修羅はぶんぶんと首を横に振り 僧の両手をしっかりと握りしめて言った  
「お坊さん 今朝 俺の中で怖い鬼が暴れていたんだ」  
彼の双眸から大粒の涙が零れ落ちる  
「俺はその鬼の声に従わなかった そのことが嬉しくてたまらないんだ」

## 六

攻撃と反撃を嗜む争いの住民  
矛盾と逃げを開き直る傲慢  
胸を張って言い切る姿はみっともない  
心を磨くどころか墮落の道を走る  
人間をやめて羽毛と尖った耳　そして牙が生えたか  
力強い生者には目も合わせられず  
死にかけの弱者には追い打ち　日常　これまでの手打ち  
宝石のように輝く瞳には人の苦痛がご馳走に見えるか  
人はその心　その有様を畜生道と呼ぶ

## 七

川が水の匂いを遠くまで運ぶ  
渇きを覚えた虎が姿を現わして 真水を腹いっぱい飲んだ  
静かに茂みへと帰っていく後ろ姿を 一人の僧が見守っていた

## 八

静かに闇が広がる  
月明りを頼りに 悲しげに彷徨うのは誰か  
里を追い出され 独りぼっち歩く若者  
彼は呻き声をもらす  
「皆は良いよな 里に暮らせて 暖かい家に住めて」  
なによりも 同胞と一緒にいられることがうらやましい  
正直者として生きた 天に祈りを捧げてきた彼は  
大勢の友からの裏切りによって 里を追い出された  
彼はここで終わりだろうか  
彼の人生は 残りの命は価値が無いのだろうか  
深い悲しみに沈む魂は二度と太陽を拝めないのだろうか

## 九

天の主よ答えてくれ  
今まであなたと皆のために祈ってきた  
出来る限り人を助けてきた  
分け与えられるものは全て分け与えた  
恩をあだで返されても 利用されても 見捨てられても  
人を想う心と血の通った魂は捨てず 涙を飲んで歯を食いしばった  
主よ答えてくれ  
他者を攻撃することに生きる喜びを得る者達が正しいのか  
人に優しくありたい良心に従った者が間違っているのか  
天の主よ どうか答えてくれ

# 十

地平線の向こうから陽光の王が姿を現す  
万物に平等に愛を注ぐ  
命は芽吹き 魂は力を得て 想念は目を覚ます  
人の生きる世には太陽が必要だが  
何よりも必要なものは 尽きることを知らない愛情だ  
人間は愛を無くせばただの畜生  
天への敬いを 人への慈しみを忘れればただの修羅  
私は人間として生きる 人を愛したいからだ  
傷を負ったとしても 痛みの伴う人生にも喜びはある  
天の主よ これが答えですね  
あの空高く昇った太陽こそが あなたの答えですね

十一

名も無い僧が粗末な墓に手を合わせていた  
それでも墓には飴細工と野花が供えられていた  
「今しがた世を去った幼子の墓です」  
親に捨てられた子だったと僧が云う  
僧は読経ではなく歌を歌った  
子が渴望していたであろう子守唄よ  
良心の是非も知らぬみどりごを守り給え

## 十二

燃え上がりなさい 私の修羅よ  
灰に帰すまでの巡礼に出かけなさい  
山を焦がさずとも 自らの想念も無に立ち戻る頃  
謙虚に涙して祈る人になるのだから



## 十三

怒りの人を皆が恐れ 襲い掛かった  
かの者は痛みを知らぬかのように戦い続け  
満身創痍 血まみれになっても鬼の形相  
名も無い僧が その男の頭を撫でて言う  
「あなたの痛む胸の内に 皆には見えない涙が流れているのだな」

## 十四

山々の果てに咲く花を悟りの花と人々が言う  
一匹の修羅が涙して山の岩肌を殴り続けた  
「俺に悟りなど開ける筈も無い」  
九日間も殴り続けた修羅は力尽きて倒れたが  
その岩肌がいつの間にか形を変えて菩薩になっていた  
菩薩は修羅を抱きかかえ川を渡ったと皆が口を揃えて言った

## 十五

火守番の老人が森のタヌキ達を相手に語る  
「炎を絶やさないとこの事は  
一度に多くを燃やすことではないよ  
燃え続けるように炎を見守って  
必要な時に薪をくべることが大事なのさ」  
修羅が火守番に問う  
「炎を消すには どうしたら良いのだ」  
老人はあっけらかんとした笑顔で応える  
「燃える物が無くなれば 炎も自ずと消えるだろうな」

## 十六

修羅の鞆には苦しい記憶の写真が入っている  
僧は冬の空を遠く眺めていた  
「つらく苦しいのならば 捨てるのも手だ」  
修羅は鞆を力いっぱい抱きしめて呟く  
「それでも 俺の大切な人生のひとつだから」  
僧は黙って 修羅に饅頭をひとつあげた

## 十七

東の果ての 日が昇る彼方に修羅がいました  
修羅は朝も昼も夜も ずっと怒っていました  
しかし 大地に若草が萌えて 海の鯨が鳴いた頃  
修羅は大粒の涙を零しながら 震える声で言いました  
「生まれてきて良かった 俺は今日に至るまで生かされてきて幸せだ」

## 十八

名も無い僧が修羅の隣に腰掛けた  
僧が歌うと 修羅も真似をして歌う  
すると 村の子供らも集まって一緒に歌い始める  
その日の夜 修羅は夢の中でも 皆と歌っていた

## 十九

北の空を眺めている修羅がいた  
彼の背中には多くの傷があった  
名も無い僧が手当てをしている  
修羅は消え入るような声で言った  
「お坊さん いつもありがとうな」

## 二十

修羅が魚を焼いていると 飢えた鬼がやってきた  
鬼は自分よりも強そうな修羅を目の前に 怯えて逃げ帰ろうとする  
「腹が減っているんだろう 人から奪って食う前に これを食べていけ」  
修羅の善意で差し出された焼き魚を受け取った鬼は 泣いていた  
その者は立ち去る前に 砂金の粒を修羅に手渡した  
「ありがとうな 人から思いやりを受けたことが俺には無かったんだ」  
鬼を見送った修羅は その鬼の言葉で頭がいっぱいになっていた



## 二十一

寂れた街道に老人が倒れ 一人の若者が駆け寄る  
彼は老人を救えないと気づいた  
せめて野の花をと 花を手折ろうとする  
すると 老人はハッキリと聞こえる声で言った  
「やめなさい その花は私より長生きします」  
老人の静かな最期に蓮が咲いた

## 二十二

僧が花束を作っているところ どこかの軍隊が通りかかった  
軍人達は花畑を踏みつぶし 野営地を作り 僧を追い出した  
修羅はその様子を 悲しい面持ちで眺めている  
僧はわずか数本の花の束を片手に 修羅の背中を叩く  
「別に良いのだ 彼らが一番つらいのだよ それを分かってあげなさい」

## 二十三

ある満月の夜 修羅はどうしても寝付けなかった  
頭の中で多くの怪物が暴れまわり 鬼達が叫んでいる  
そこで 彼は僧から教わった自然の理を思い出した  
「満月と新月の時は気を付けなさい  
満月の時は心が自然と高ぶってしまう  
新月の時は心が自然と沈んでしまうからな」

## 二十四

子供らが殴り合いをしているところ 偶然にも修羅が通りかかった  
彼は何も言わず ただ二人の争いを止めた  
「どうして あいつが悪いのに」  
「いいや こいつが悪いんだ」  
修羅は悲しい面持ちで 大声で言った  
「友達を失って悲しむのは自分だ」

## 二十五

「修羅よ お前さん 本当は勉学の道へと進みたいのではないかね」

修羅は僧に対して 嬉しそうに笑いながら応える

「いや いいんだ 俺はもう毎日 お坊さんのもとの勉強させてもらっているから」

彼にとって学ぶことについては 学問も大切だと知りながら より優先したいことがある

それは 自らの良心に従った人生のための学びであった

## 二十六

「お坊さん 待っている 今お湯を沸かしてやるから」  
僧が冬の病魔にやられて寝込んでいた  
「俺な お坊さんが教えてくれた薬草 いっぱい集めてきたんだ」  
修羅の眼には涙が溢れていた  
僧が咳き込むと また涙が頬を伝う  
「早く元気になるんだぞ なあ お坊さん」

## 二十七

「おっかあ ごめんな 俺はあの頃 まだお坊さんの所で勉強していなかったから  
薬草の種類も解らないで おっかあのために何もしてあげられなかったな  
おっかあは 俺が集めた桑の実を 美味しい 美味って食べてくれたよな  
なあ なあ おっかあ そこには仏様や神様はいるか  
皆で仲良く 温かく 穏やかに暮らしているか 俺のこと まだ覚えているか」

## 二十八

村人達は僧を気づかい にんじんや干し魚を持ってきた  
それを代わりに受け取り 調理してくれたのは修羅であった  
人々は村に戻った後「不思議だ 珍しいものを見た」と口を揃えた  
「見たかい あの修羅があんなにも優しい顔を 仏さんのような穏やかな顔を」  
「ああ見たとも 普段の怖い顔をしている修羅とは別人の様だった」  
「人は生まれ変われるのかもしれないね」



## 二十九

「ああ もう朝か 何日も眠っていたようだ」  
咳が治まり 健やかな気持ちで目が覚めた僧に対し  
修羅は何も語らなかった 静かに合掌して 神仏に感謝を捧げていた

## 三十

僧は都にいる師に手紙を書いた

『私は幸せ者です 今も天と地の理を学び続け 常に新鮮な気持ちです

また 我が子の様に愛おしく 私を親の様に敬ってくれる教え子にも恵まれました』

## 三十一

薄明のもと 修羅は墓地を訪ねた  
粗末な墓の周りを片付けて 新しい花束を供える  
修羅は合掌しながら静かに時を過ごす  
祈る姿を百舌鳥が見守っていた

## 三十二

修羅は複雑な想いであった  
過去の記憶に見え隠れする怨敵  
胸の内から燃え滾る炎  
心底にて神仏へと祈り捧げる良心  
だからこそ 彼は武器を手にとらなかった  
悲しみに恐怖 怒りや憎しみ  
それでも武器を手にとらぬ修羅の美しさ  
他者を切り捨てる事は何も解決していないのだから

## 三十三

怨敵を前に動かない修羅

彼はじっと耐えた

彼は胸の内の己と対峙していた

それこそが人間と畜生の違いであると僧は云う

## 三十四

「修羅よ どうしたのだ 満身創痍ではないか」  
体中に傷ができて 血まみれ泥まみれの修羅  
それでも修羅は穏やかな笑顔であった  
「お坊さん 俺が転んだだけだよ」  
僧は涙を堪えて 修羅に手当てを施した

## 三十五

今は眠りなさい 心の鬼が騒いでも休みなさい  
今は食べなさい 優しい僧と食事を共にしなさい  
今は歌いなさい 村の子供らと過ごしなさい  
今は泣きなさい あなたの祈りは全て届いている

## 三十六

修羅にも欲望はある 正義欲がある  
それなればこそ彼は自制心を鍛えている  
人の語る 人の行う その正義とは絶対ではない  
謙虚な想いから 修羅もまた自身の未熟を認める  
だからこそ 彼は正義のつもりにならない



## 三十七

餓えた修羅がいた  
彼は喉の渇きと空腹に苦しみ 街道に倒れていた  
名も無い僧が彼に粥を作ってあげたことが始まりであった  
修羅には正義心がある  
修羅が己が想念を見つめ直し 僧のもとで学ぶことは  
「心に咲く一輪の蓮の花を見せてあげたい」という恩返しのためである

## 三十八

絶望した青年がいた

彼は志高く生きてきた 学び励み努めてきた

だが その者は全てを失ったという喪失感に飲まれ

今 自らの命を絶とうとしていた

すると 暗い森の向こう側から雷鳴の様な雄叫びが轟いた

## 三十九

雄叫びの正体は修羅であった  
動く筈も無い大岩に向かって 満身の力を込めて咆えていた  
青年が訳を訊いたところ 修羅はその岩から眼をそらさず  
「俺の業と対峙しているのだ 自ら背負ったものだ 自分の手で解決して見せる」  
またもやいかずちの様な声で叫ぶのだ  
青年から自死の念が消え失せた  
彼は唇を震わせ 溢れる涙を堪えようともせずに合掌し 祈り始めた

## 四十

村の外れに武人が跪いていた  
彼の顔には深い憂いが見て取れた  
僧が温かい茶を用意したところ 武人は消え入るような声で問う  
「なぜ 私の様な無縁の者に親切にしてくださるのだ」  
「人は皆が神仏の子であると信じています 助けることに理由は求めません」  
僧は「それに」と付け加えた  
「私は一人一人の弟子と対話することで 多くを学ばせてもらっています  
人間は独りでは『在る』ことすらかなわないと師から教わりました  
なればこそ 共に在ることで稲穂を実らせ 生涯学びを分かち合おうと思うのです」

## 四十一

青年が畑仕事に精を出していた  
彼の目蓋の裏には 大岩に叫ぶ修羅の姿が焼き付いていた  
「あれ程の魂を持って生きることには一生懸命になれば  
結果の有る無しなど もはや問題ではない  
報われたか報われないか それも問題ではない  
自らを救う 自らを磨く あの気合いが私には欠けていたのだ」  
疲労さえも心地よい 生きることには力を尽くす  
それは我欲に満ちた傲慢ではなく 誇りに満ちた無欲な志となる

## 四十二

ろうそくに火を灯して眺めていると 不思議と落ち着く  
胸の内で燃え上がる鬼達が口を閉ざす  
人の心 人の想念に付け入る悪魔達が逃げ出す  
私は今一人だ 一人の人間としてここにいる  
修羅の形相を浮かべながら生きたこれまでを  
静かに溢れる涙滴の様に数えたい  
私は今一人だ これまで風が吹き波が荒れてきた魂  
それを静かに磨き続けたいのだ

## 四十三

夢を見ていた 恐ろしい夢であった  
私は地獄の鬼に姿が変わっていたのだが  
地獄界に落ちてくる人間達を襲っていた  
攻撃し 切り裂き その肉を喰らっていた  
他にも鬼は大勢いるが 誰も仲間ではないのだ  
皆が皆を敵として認識し 武器を手にして狂う  
ほんの一時期 仲間だ友達だ と思える鬼がいても  
必ず皆が裏切るのだ  
そしていつもの争いに戻ってしまう  
この様な悪夢で目が覚めてしまった早朝は  
あの明星が何よりも美しい

## 四十四

私は愚か者です  
人の世に生まれた人間でありながら  
我が想念はまるで 赦しを知らない  
この様にして無限に争い続けてきた生涯を  
今はただ歯を食いしばって回顧の念に囚われる  
人は皆本能を持っており そこから欲が生じて  
やがて知性や理性を得たは良いものの 神仏ではないから完璧ではなくて  
信じていたものがやがて自我我欲および盲目的な執念へと変り果て  
愛や勇気や信念を口にして 冒瀆や逃避や矛盾へと身を落とす  
私は救われたいと願う以上に 自助努力に励みたい  
この物質界という泥の中でも 一輪の蓮を咲かせたい



## 四十五

昔々 あるところに 大きな大きな山がありました  
山の名は「書破山」と神様仏様が名付けました  
かの山に住まう者は 神仏に赦しを請う亡者ばかりです  
しかし その必死に書いたお手紙も いつも神仏には届きません  
その過程で燃え尽きてしまうのです  
かの山の頂を目指し 登る者達もいます 彼らは罪人です  
ですが 彼らは言い訳をしません 逃げません 愚痴をこぼしません  
ただ 一緒に山を登る仲間達を励まして「あの山の頂に立とう」と鼓舞します  
なぜならば 彼らは信じていたからです 自ら背負った罪は償えるということを  
書破山の山頂から空を拝めば 罪は赦されると信じていたのです  
このおとぎ話ができるよりも もっともっと昔の話  
一人の兵士と一人の将軍が 王様からの命令を受けて山を登りました  
その二人が山頂から身に浴びた夜明けの輝きは きっと神様仏様だったのでしょう  
二人の心は救われました

## 四十六

独りぼっちで彷徨う若者がいました  
彼は涙も枯れ果てて なんだか自分自身がおかしく思えてしまい  
自らを馬鹿にして笑い出しました  
すると 目の前の林道から修羅が姿を現して  
ゴオオオオ と叫んだのです  
若者は そのあまりにも大きな咆哮によって雑念が吹き飛び  
もっと真剣になろう 自らを否定することに執着するのはやめよう  
もっと前を向こう たとえ躓くことがあってもまた立ち上がろう  
その様に 強い意志を持ったのです  
その方が 自らを馬鹿にして笑い続け 何も志を立てずに朽ちていくより  
よほど多くの学びがあると気付いたからでした  
修羅の雄叫びから「本気」を感じ取ったからです

## 四十七

名も無い僧に 修羅が相談をしました  
「俺は自らを許すことができない よって他の誰も許すことができない  
俺は自らを信じていない よって他の誰も信じることができない」  
すると 僧は言いました  
「つまり 自らを愛していないからこそ 他者に愛情を向けることもできないのだね」  
修羅は昔の過ちを振り返ると 全て己が自身に持っている姿勢こそが  
他者に対しての言動の根源であったと気づきます  
僧は穏やかに話しました  
「大丈夫だ お前のその姿勢 全てが間違っている訳ではない  
自らに厳しくあることは間違いではない ただ 物事には『良い塩梅』というものが  
ある」  
修羅は僧にお礼を伝え その日は眠りました

## 四十八

過去があり 現在があり 未来がある  
この三つの理は揺るがない  
前世 現世 未来世があり  
この仕組みへの理解はどこか胸の奥で志を照らしている  
私の中の修羅も 育んできた良心も 勇気をもらっている  
また この世に命をかけて生み育ててくださった母の愛も  
理性を鍛えて 倫理観と動じない心を教えてくださった父の愛も  
それら全てが 言葉にできないほどに私を抱きしめてくれる「よろこび」です  
そのよろこびによって 私の近くにいる誰かを温められることがあるならば  
私は人の世に生まれ 暮らし そしていつかは朽ちていく輪廻に感謝できる  
今はまだ その真情を生涯通して言動に反映するための 修行の途中  
夢中になって生きている  
本気で生きている

## 四十九

夜明けの風が吹いている  
不思議と想念が落ち着く  
胸の内の修羅が真剣な眼差しで伝えている  
「生きることは 学びと努力と愛だ 無条件の幸せだ」  
私もその言葉に共感した  
幸か不幸か 充分か不足か  
その物差しは人の世に人が作り出したもの  
この美しい明け方と同じように 本来この世に不足は無い

## 五十

君が道に迷った時は 私が全力で助けに向かいます  
大声で場所を知らせ 松明を持って駆け寄り 手を固く握って歩きます  
私には大したことは出来ません  
謙虚を心掛けても 自惚れたり傲慢になることもあります  
どれほど良心の声に従っても 至らないことも多いです  
きっと 皆も同じではないかと思うことがあります  
人は皆が未熟だからこそ 稲穂を分かち合い 学び合うことができるのではないかと  
そう信じたいのです  
この信条に自ら苦しめられることも何度もありました  
私の修羅が叫び 自滅へ向かおうと葛藤を募らせることもあります  
それでも私は自らを信じて 人を信じて 人として生きたいのです

終わり



f 2 3 0 0 d b 61 e 2 c 6 0 7 f.png





---

詩集 修羅と僧

---

著 不動心りんご  
イラスト みやみやみや鋼

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---